



Title	慈善団体から見た華南地域の統合：近年のマカオの事例を中心に
Author(s)	芹澤, 知広
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 117-133
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9555">https://doi.org/10.18910/9555</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 慈善団体から見た華南地域の統合

——近年のマカオの事例を中心に——

### 〈要旨〉

香港と同じく今世紀末に中国へと返還されるポルトガル領マカオに対して、日本人はほとんど関心を払っていない。しかしながら、近年マカオにおいては、香港や広州との関わりの中で華人が勢力を持っており、来るべき華南地域の統合を占う上で、その存在は無視できない。そこで本稿では、マカオの慈善団体の事例を紹介し、それに基づいて近年の華南地域に起こっている社会的・文化的変化について考察する。

歴史を通じて、この地域には慈善団体のあいだのネットワークが存在してきた。近年中国では改革・開放に伴う民間慈善団体の設立が著しい動きとしてあり、それは、かつてのネットワークの復活をもたらすとともに、新しい香港起源の市民社会の文化を導入している。例えば、香港で著名なイベントとなったある募金キャンペーンは、一九八四年にマカオへ、そして一九八八年にはマカオから広東省中山市へと伝わっている。中国政府は、政府の財政援助に頼らないマカオの慈善団体こそ参考に値すると見なしており、そのため、マカオは香港文化を広東省の諸都市へもたらす媒体とし

て重要な位置を占めていると考えることができる。

### キーワード

華南地域、慈善団体、マカオ、香港文化、市民社会

芹澤 知広

## 一、課題としてのマカオ研究

一九九七年七月一日に祖国中国へと返還される英領植民地香港に對して、現在日本では多くの人々が関心を注いでいる。旅行社は競ってツアーを組織し、多くの雑誌やテレビ番組が特集を企画している。この現在ブームを迎えた「香港ブーム」は、中国と英国が共同声明を発表し、返還が明らかとなった一九八四年以降の十年あまりの間の出来事であると言つてよいであろう。加えて、この間、香港内外の研究者による香港研究も大きく発展した。<sup>①</sup>

それでは、香港とともに今世紀中に中国へ返還されるマカオについて、日本人は関心を示しているであろうか。その返還については、香港に遅れること三年、一九八七年に中国とポルトガルが共同声明を発表して、一九九九年十二月二十日から中国が主権を行使することが決められた。しかしながら、香港より三百年も長い歴史を持ち、日本人との関わりも深いこの植民地に對して、私たちはあまり多くの情報を持ち合わせておらず、また、香港の付屬物にすぎないもののようにしか扱わない傾向がある。このことは、例えば、一九八〇年代に出された香港についての標準的な日本語の概説書が、付け足しのような章を設けてマカオを記述していることから窺える。<sup>②</sup> このようにマカオについての理解を深める作業は、今後も行つべきものとして私たちに残されているのである。

さらに、香港から視野を大きく広げてみると、この香港ブームの

時代は、一九七〇年代の末から始まった中華人民共和国の「改革・開放」政策の流れの中にあり、一九八七年に中華民国で戒嚴令が解除され、ポスト冷戦の時代に入る中で、香港を挟む「兩岸」の交流が盛んになった時代でもある。福建省や広東省の沿岸部には経済特区がつくられて、台湾・香港との密接な関係の下に経済発展が図られ、中国大陸の巨大な市場へと参入しようとする日本においては、「大中華経済圏／グレート・チャイナ」や「華南経済圏」ということばを使って、この国境を越えた中国人の経済活動について論じた記事や書籍が増加することになった。この近年の流れに注目してみると、北京や台北の公式見解に代表されるような政治的対立や「東西」のイデオロギー対立から、中国人の文化的統一を背景とした経済活動の実態やナショナルリズムへと日本人の中国研究の視点が移動しているという傾向をみとめることができる。

しかしながら、沿岸部を中心に現在起こっている中国の変化について、政治や経済に焦点を当てて語るという状況は変わらず、社会的・文化的な側面に見られる変化については十分に論じられていない。結局のところ、今世紀末の香港・マカオの中国返還の後に、どのような社会的・文化的変化が華南地域に生じるのか、さらには、地域ブロック形成への世界的傾向のなかで、巨大化する中国を含む東アジアの国々はどうのような社会的・文化的な統合が可能であるか、という問題を考えるための情報は、マカオに限らず、中国沿岸部の諸都市や香港についても、私たちは多くを持ち合わせていないのである。

本稿においては、この今日の中国、さらには日中関係をめぐる歴史経緯を踏まえて、マカオの慈善団体の歴史と近年の動向を主に紹介しながら、返還を控えて今日起こりつつある香港・マカオの華南地域への統合と、それに伴う社会的・文化的変化について考察する。基となる資料は、文書資料やインタビュー調査であるが、いずれも十分ではなく、またマカオに長期間滞在しての実地調査は行っていないため、予備的研究の域を出ない<sup>①</sup>。しかしながら、先に見た華南地域に対する日本人の情報の偏りを考慮に入れるならば、この時期に問題提起として断片的な資料と今後の研究のためのアイデアを示すことには、それなりの意義があると考えられる。

## 二、共産主義解放前の中国における

### 慈善団体のネットワーク

経済開放後の中華人民共和国における社会的な混乱について、報道や個人の体験談などを通して、多くの話が流布している。香港で友人から聞いたある話は、長距離列車で中国大陸を旅行している途中、ギャングの一団が列車を乗っ取り、列車の両端の出入り口をピストルを持って塞いでいるあいだ、次々と乗客の財布を取り上げていったというものである。こうした社会問題にまつわるエピソードは、前世紀末の清朝の時代に起きた社会的混乱を思わせるものであるが、いっぽう、経済開放後の今日に旧習が復活したかのように見える社会事象の中には、犯罪のような社会にとって好ましくないも

の他に、好ましいものも含まれている。近年多く設立されている民間の慈善団体は、その例になるであろう。

それでは、この中国の民間慈善団体について歴史を溯って見てみることにする。この解放前の民間慈善団体は、「善堂」と総称され、今日の中国社会史研究において、市民社会論や地域社会論と関係して注目を集める研究対象となっている。ここでは、私たちの関心に沿って、「地域」と「ネットワーク」に焦点を当てて、その研究史を概観することにした。

善堂の研究の先駆者のひとりである夫馬進の研究によれば、清末清初の時期に大都市で生まれた「善会」というヴォランティア・アソシエーションは、その後全国に広まり、各地方の都市に善堂がつくられていった。その広がりを見ると、広東省では他の沿岸部の省に比べ、遅れて普及しており、この地方ごとの普及の特徴は、慈善事業の需要という社会的要請によるだけでなく、運営資金の調達や地方官僚による保護という各地方の政治経済的条件にも影響を受けていることが指摘されている<sup>②</sup>。近年は、この夫馬の問題提起を受け、地域により密着した実証研究から善堂の普及を論じる研究が出てきている。例えば、山本進は、十九世紀の江南（江蘇省・浙江省）において善堂が著しく発展した原因として、当時の国家財政の逼迫と地方行政経費の不足に伴い、役人が行き倒れや殺人などの検死料を不当に取るようになったことに対抗して、富裕層が自分たちの財産を守るために善堂を建てたことを指摘し、慈善を導く観念の影響よりは、むしろ国家との関係を重視して善堂の普及を論じている<sup>③</sup>。

いっぽう、もうひとりの先駆者の可児弘明は、香港の「保良局」を中心とした東南アジアの華人社会と中国大陸の諸都市を結ぶ、婦女子の保護・送還のネットワークに早くから注目していた。<sup>⑥</sup>この視点を受けて行われている最近の研究の例としては、帆刈浩之の上海と香港の研究を挙げることができる。帆刈は、慈善事業の担い手を善堂としてではなく同郷ギルドとして扱い、清末の上海に存在した「四明公所」という寧波人の同郷ギルドを中心にして、寧波の故郷から上海の商店へと店員がリクルートされるのと同じルートで、各善堂を経由しながら都市で死亡した同郷人の棺が故郷へ送られるネットワークが存在したことを示している。<sup>⑦</sup>

ところで、ここで注意をしておく必要があるのは、「ネットワーク」という用語である。通常、社会学や人類学の分野では、「ネットワーク」は、確固とした規範を扱う「構造」という用語に対して、人間の自由な結びつきを許す社会関係を分析するための用語として使われることが多い。特に人類学では、中部アフリカの都市研究に代表される「社会的ネットワーク (social networks)」の研究が、都市人類学のひとつの源流ともなっている。<sup>⑧</sup>このように個人に焦点を当ててネットワークを考えた場合、中国社会の文脈においては、それは「関係 (guanxi)」の問題となり、私たちが先に見た善堂間のネットワークとは異なった問題になる。<sup>⑨</sup>ここでは、帆刈が「運棺ネットワーク」ということを始めに使っていたことを考慮に入れて、ネットワークという用語をその内容に注意して使うことを提案したい。どのような団体間のものか、どのような資源（人間・物質

・貨幣・情報など）が行き来しているのか、という点に注意を向けながらネットワークという語を使用していくことが重要であろう。先に触れた慈善団体間のネットワークの例は、婦女子や遺体が流通するものであったが、他に何が対象となったのであるか。まず、金銭的な財を挙げることができる。その例としては、帆刈が研究した香港の「東華医院」の救済活動が興味深い。例えば、紹介されている事例のひとつは、次のようなものである。

「光緒二十六年（一九〇〇）八月、義和団事件に際して米価高騰に苦しむ北京在住広東人同郷の官紳からの捐金依頼を受けた上海広肇公所は東華医院に集捐を打電要請した。東華医院の董事は衆議の上、前月天津救済のために集めた捐金を充てることを決定する。さらに東華医院は広州の崇正善堂および澳門の鏡湖医院に対して同様の要請を行った。そして東華医院は一千ドルを上海匯豊銀行を通して広肇公所へ送金し、鏡湖医院も銀五百両を泰隆銀号から東華医院に送金し、東華医院はそれを香港の瑞吉銀号を通して広肇公所へと送ったのであった。」<sup>⑩</sup>

ここに見られるのは、上海から香港、そして広州・マカオへの情報の伝達と、そのルートを通じての上海への送金である。この清末の時期に存在した香港・マカオ・広州を結ぶ地域のつながりは、後に見るように今日の慈善団体のあいだにも見られるものである。この例での情報は単なる依頼であったが、ノウ・ハウという知識も伝

達される資源であった。東華医院の初期の歴史を研究したエリザベス・シンが指摘するように、一八七〇年に香港の法律上で正式に発足した東華医院が用いている規約やその医者の登用・派遣などのノウ・ハウは、広州の方便医院（一九〇一年設立）をはじめ、各地の華人社会に設立された慈善団体に伝わっていた。<sup>①</sup>

このことに関係して、当時の広東人の世界の広がりと、植民地時代の雰囲気や伝わるエピソードをひとつ加えておこう。香港から遠く離れたインド洋の西に浮かぶ小島モーリシヤスは、十九世紀の末には英国の植民地であった。一八八九年に、この地の中国人が現地のクレオール女性を誘拐して香港に売り飛ばしたため、モーリシヤス政府が香港政府に女性たちの送還を依頼するという事件が二度も起こった。そのためモーリシヤス政府は、当時の中国人社会のリーダーである広東人（順徳県人）の Affan Tank-Wen に、二度と同じことを起こさないようにと警告する手紙を送った。これに対し、Affan Tank-Wen は、翌年、五五〇人の中国人商人を代表して政府に手紙を送り、中国人商人の営業許可に五パーセントの税を掛け、その収益を基金にして、東華医院をモデルにした婦女子の保護を目的とする慈善団体をつくることを提案している。しかし政府はこの提案を受け入れず、この善堂は死産した。<sup>②</sup>

### 三、華南地域統合へ向けての香港・マカオの情勢

再び視線を現代へと戻そう。モーリシヤスの善堂が頓挫して百年

後の一九八九年、中国では学生たちの民主化運動が挫折した天安門事件が起こり、香港では中国政府に抗議する市民のデモが盛り上がった。一九九七年を控えた香港住民の中には、この事件を契機にして、「香港人」のアイデンティティに目覚めた人や、共産主義政府の脅威を感じ、改めて移民の準備を始めた人が少なからずいた。しかし、大部分の人々にとって、香港で中国返還を迎えることは避けられないことであった。彼らの中国に対する複雑な感情は、熱狂的なナショナリズムと結びついた一九九〇年代のいくつかの大衆運動に表れていると言っても間違いではないであろう。一九九一年夏の「華東水災」キャンペーン、一九九三年夏の「減災扶貧」キャンペーン、一九九四年夏の「華南水災」キャンペーン、一九九六年冬の「雲南地震」キャンペーン、これらの一連の中国大陸への慈善活動の募金キャンペーンは、一面的には、その間に香港の流行歌手が頻繁に中国大陸で行ったチャリティー・コンサートと同様、「六四」（天安門事件）に対して表明した中国への批判的態度を帳消しにして、何とか無事に「九七」を乗り切りたいという香港住民の思いが含まれたものであったと解釈することもできる。

いっぽう、テレビ局や芸能人が中心になって臨時に組織されるこれらのキャンペーンとは違って、長いあいだ慈善活動に従事してきた香港の慈善団体は、返還が決まった一九八〇年代から、すでに中国との関わりを強めていた。<sup>③</sup>例えば、東華医院を前身とした「東華三院」と、戦後に設立された「仁濟医院」は、それぞれ一九八七年に初めて理事会の北京訪問を行っている。その後、この二つの慈

善団体は中国との交流を活発に行い、一九九〇年からは毎年北京を訪問している（表を参照）。

東華三院	仁済医院
九〇年九月北京・西安七日間	九〇年二月北京・広州七日間 九〇年十月から十一月 北京・西安六日間
九一年北京・上海・杭州 (華東水災のために、徐展堂 主席が百万香港ドルを寄付)	九一年十月から十一月北京・ 南京・上海八日間
九二年北京・ハルビン 九二年五月深圳二日間	九二年十一月北京五日間
九三年北京・承德・広州	九三年四月マカオ・中山三日間 九三年十月北京四日間
九四年北京・上海	九四年九月マカオ二日間 (鏡湖医院訪問) 九四年九月北京五日間

表 「一九九〇年から九四年にかけての東華三院・仁済医院の理事会の中国訪問」（各年次報告書に基づく）

一九九三年の仁済医院の北京訪問を例に、どのように交流活動が行われているのかを見てみることにしよう。王子沐主席を団長とする理事たちやその夫人たち四十名の訪問団は、十月二十七日に北京に到着。翌朝、「民政部」を訪問。双方の代表が、事業の内容を紹介し、相手の行ってきた事業を讃えた。特に民政部の楊衍銀副部長は、民政部が、香港から帰郷した老人や、子供たちが移民した後で一人暮らしをしている老人を対象とした老人ホームを深圳に建てる計画を紹介し、仁済医院をはじめ香港の大きな慈善団体が協力してくれることを歓迎すると述べている。訪問団は、午後は、「國務院港澳弁公室」を訪問。ここでは、王主席が、一九九七年以降に香港

の慈善団体に対して中国が採用する政策について香港の慈善団体に関心を持っていると述べたのに対して、魯平主任が、特別行政区の政府は慈善団体へ財政的援助や支持を続けることが基本法に明言されているので、安心してほしいと答える場面もあった。この晩は、港澳弁公室の高官たちが「釣魚台国賓館」に訪問団を招待した。訪問団は、翌日、「中華全国工商業連合会」を訪問し、北京を立つ前の晩に、感謝の意を込めて、訪問した三つの組織の代表を「王府大酒店」に招待して宴会を行った。そして香港に戻ると早速、この中国との交流について記者会見を空港で行って、香港の市民に報告している。

こうした交流は、北京の官庁とのあいだにのみ行われているのではない。広州においては、一九九四年六月に「広州市慈善会」という解放後初の民間慈善団体が設立され、現在募金活動とともに市内の貧困家庭への金銭的援助も行っているが、この成立大会に東華三院は招かれて出席している。また、翌年の三月には、広州市慈善会が訪問団を組織し、マカオの「同善堂」（後述）を訪問し、その施設を見学して、お互いの慈善活動について意見交換をしている。

このように、今日、香港とマカオの慈善団体は、今世紀末の中国返還を控えて、中国の関係官庁や広東省の慈善団体との関わりを強めている。しかしながら、この節の最初に見たような九十年代の香港に存在するある種の熱狂的な情景は、マカオには見られない。このことは、香港とは異なる今日のマカオの持つ社会的・政治的文脈に起因している。次節でマカオの慈善団体について見る前に、この

現代マカオの歴史的背景について触れておくことにしよう。その事例においても香港・広州との密接な関係を窺うことができる。

マカオの現代史も、香港と同様、一九六〇年代後半の中国の文化大革命が、ひとつの転機となっている。香港においては、一九六六年・六七年の暴動の後、政府が積極的に住民の社会生活に介入し、コミュニティ・デイベロップメントなどの社会政策を通じて、中国でもなく英国でもない、「香港」の意識を人々が抱くような方向で歴史が進んだ。一方、マカオは、一九六六年から六七年にかけての暴動をきっかけに、国民党勢力が一掃され、共産中国に賛同する華人住民の主導権が確立された。

マカオの暴動の前哨戦は、一九五二年の国境の小競り合いに溯る。マカオから国境を越えて中国へ入ったポルトガル兵士が殺されるといふ事件があり、それから両国の協議が始まった。この時、マカオの交渉代表に加わっていたのが、中華総商会の何賢主席と馬萬祺副主席で、後にこの二人はマカオを代表して中国と交渉するリーダーになる。この交渉中にはマカオと中国の物資の交流も途絶え、結局、三週間後にポルトガルが非を認めて決着がついた。その後も、中国がマカオの主権を回復する機会があったが、金・賭博・観光というマカオの産業を考慮し、立場の変更は行わなかった。

その均衡を崩したのは、中国の文化大革命である。北京から広州へ紅衛兵の運動が飛び火し、広州と商業関係を持つマカオの中国人商業エリートは、その影響力を無視できない状況に置かれた。そして、一九六六年十一月十五日、タイパ島の左翼の「街坊会」(町内

会)が、許可を得る前に学校の改築をしていたところ、それを中止させようとした警察と乱闘になり、二十名以上の島民が鏡湖医院に運ばれる事件が起こった。そして、北京放送は、この島民の負傷について、武器を持たない人々が四十人負傷し、そのうちの十人は重症であると報じ、左翼の描いたシナリオにポルトガル側が乗せられたかたちで事態が進行することになった。その後、街坊会からマカオ政府に賠償の要求が出され、その扱いをめぐって市民の政府に対する大規模な抗議行動が起こった。そして十二月十日に、この要求を踏まえて中国政府が改めて要求を出して、暴動は国際問題に発展した。事態の収拾を望むポルトガルは、この要求を全面的に受け入れたが、その中には、国民党関係者の活動を以後許さないことを保証するということが含まれていた。このこと背景には、一九五六年の「九龍暴動」の後、香港政府が住民の政治活動に対して敏感になったことに起因して、当時のマカオが国民党の活動の基地になっていたということもあった。

このように、六十年代の中華人民共和国の政治的駆け引きが圧倒的な成功に終わったマカオにおいては、今日も中国の影響力が強い。先に触れた街坊会をはじめ、慈善団体などの「社團」は、すべて「親中」である。またこの他に、特に現在の香港は持たず、マカオが持っている社会的な特質としては、エリート家族の社会的な影響力がある。今日のマカオにおいては、カジノ王として有名なスタンレー・ホー(何鴻燊)を筆頭に、前述の何賢(故人、現在は息子の何厚鏘が後を継いでいる)、馬萬祺、そして崔德祺の「澳門四大勢力」

が存在している<sup>⑧</sup>。次節で見ると、彼らとその家族は、政界や経済界で活躍しているばかりではなく、多くの社団にも役員として加わり、慈善活動も活発に行っている。

#### 四、マカオにおける主な慈善団体の歴史と現在

##### (一) 鏡湖医院

現在のマカオにおいて、公立の「仁伯爵綜合医院（山頂医院）」と並ぶ総合病院が、この民間の慈善団体の病院である。この団体は、一八七一年にマカオの華人たちが、設立のための理事会（理事百十五人）をつくったことに始まる。その理事会は、一八七四年にいったん解散し、あらためて十二人の理事が選ばれ、以後の十七年間に、不動産の購買、規約の作成などを行い、善堂として徐々に整備していった。設立の目的は、医療に限らず慈善活動一般を行うことであり、運棺や道路の改修などの社会サービスも行い、一八九二年の時点では無料の学校も五校持っていた。当初、施す医療は専ら中国医学であったが、香港で教育を受けた、後の革命の父・孫文が、一八九二年にボランティアとして西洋医学の医者をつとめたことをきっかけに西洋医学が導入された。そして一九四四年をもって中国医学は施されなくなった。なお、一九四五年以前には、中国人の医師が手術を行う権利をマカオ政府は認めなかったが、鏡湖医院は広州とマカオの西洋医学の医師から成る顧問団を組織し、その顧問団の努力によって、一九四五年に手術室が設けられるという「大革新」も

起きている<sup>⑨</sup>。

そして一九四六年に、現在の組織の原型がつけられている。それは、「鏡湖医院慈善会」を上位組織にして、その下に「鏡平学校」（前は「鏡湖平民学校」）、「鏡湖護士助産学校」、「鏡湖医院」、「殯儀館」（葬儀場）、「思親園」（遺骨を納める場所）、の四つの施設を置くというものである。この慈善会の理事会（「董事会」）は、マカオの華人リーダーから成る組織であり、鏡湖医院の最高決定機関である。理事には、「工会」（労働組合）や街坊会などのマカオの社团やエリート家族の代表が就き（例えば、同善堂からは三名が代表する、というような割り当て制度がある）、二年から三年に一回改選をする。現在の理事会は、第十五屆で、主席は馬萬祺、副主席は何鴻燊がつとめている。かつて、一九五四年から一九八五年にかけては、主席が何賢、副主席が柯麟（一九四九年の革命以前に、表では鏡湖医院の医師・院長の身分にあって、裏では中国共産党の香港・マカオにおける地下活動の責任者であった人物）と馬萬祺、という体制が長く続いていた<sup>⑩</sup>。

なお、マカオの華人商業エリートを代表する組織の歴史的变化について補足しておくならば、明朝末期（十七世紀半ば）からは「媽閣廟」と「蓮峯廟」、乾隆年間（一七三六―一七三九年）からは、「三街會館」（旧「營地街市」前の「閔帝廟」、同治年間（一八六二―一七四年）からは「鏡湖医院」、そして中華民国期（一九一一年―）からは「澳門商会」（中華總商会）において、華人社会やその商業活動にとって重要な問題の討議が行われた<sup>⑪</sup>。

現在、鏡湖医院は、香港・中国との積極的な交流関係を持っている。東華三院、仁濟医院と連絡を取り合い、また中国の民政部からは副部長が鏡湖医院を訪問している。そしてマカオの中では、同善堂との関わりが密接である。

また運営の経費については、診察費からの収入を病院の支出に当てているが、診察費の種類は三つに分けられており、診察費を額面どおり徴収する以外に、価格を下げることや無料にすることも行っている。そのため、収入のうちでは、人々からの寄付も大きな割合を占めている。例えば、何鴻燊の「澳門旅遊娛樂公司」は、一九八五年より毎年五十万パタカを寄付している<sup>22)</sup>。また、長い歴史の間に人々が寄付した不動産も、重要な資金源になっている。募金活動は、特に毎年行うことにはなっておらず、最近では、一九九〇年六月二十三日に、鄭少秋などの香港のスターが無料で出演して「愛心滿鏡湖」というチャリティー・ナイトショーが行われた。なお、これら人々からの様々な貢献に比べて、政府の財政的援助は非常に小さい。以上、鏡湖医院の歴史を証言する遺物については、近年まで散逸するにまかされていた。しかし、その後一九八八年になって、第十三屆の理事会が費用を出して「鏡湖歴史紀念館」が病院の中庭に建てられた。現在職員二人が、資料の整理・展示を行っている。

## (二) 同善堂

鏡湖医院、澳門商会（一九一三年設立）と並ぶマカオの三大華人社団としての歴史を持つ同善堂は、一八九二年に四百八人の賛同者

を得て設立されている。その中には、マカオ・香港・珠江デルタの商人の他、横浜やハワイの華僑も含まれていた。設立の目的としては、鏡湖医院設立後も解決されずに残されたマカオの慈善事業の需要に対応することがあった。同善堂の前身となる組織は、一八八八年にすでにつくられており、慈善事業に熱意を持ったマカオ・香港の商人が、無料の医療サービスや共同墓地（「義塚」）の設置、棺の提供、「善書」の配布、文字が書かれた紙の回収などの慈善活動を行っていた。その後、各サービスの提供は、同善堂の中でいくつかの善会がつくられて発展していくことになった。例えば、貧しい母子に薬品や食品を配る「保産善会」（一八九四年）、貧しい人々に棺を配る「施棺木伴工善会」（一八九五年）、「贈医施藥」を行う「施藥劑善会」（一八九七年）、老人や貧者に衣類や穀物を配る「賜恤善会」（一八九八年）、毎年の旧曆七月十五日（中元節）に道教の儀礼を行う「中元水陸超幽会」（一八九八年）などである<sup>23)</sup>。

機能主義的な病院建築と言える鏡湖医院の大きな建物とは違って、「庇山耶街」にある同善堂の建物は、薄緑色で三階建てのコロニアル様式の外観と「中医館」のような内部の雰囲気を持っている。この建物は、一九二四年に落成し、その年から「同善堂貧民義学」が開設され、無料の教育サービスも始まった。また一九三七年以前には、晩に「聖諭」を講じる儒教道德の普及活動も建物内で行われた。そして一九二五年からは、あらためて「施粥施衣救濟会」が始まっている。一九三七年から四五にかけての日中戦争期は、中立を保ったマカオにおいても、難民の流入などによって社会が混乱し疲弊

した時代であったが、この施粥施衣をはじめ、多くの慈善活動が同善堂によって行われた。一九四一年には、処方された漢方薬を直接受け取れるよう便宜を図って、同善堂の建物の向かいに「同善堂薬局」が開設されている。

現在、庇山耶街の建物の中には診療所があり、近年は二十名以上の医者を擁し、中国医学と西洋医学の様々な部門を設けて、無料の診察を行っている。この他、「清平直街」や「台山」にも無料の診療所がある。同善堂薬局に隣接した学校には、千数百名の生徒がいるが、幼稚園（三年制）、小学校（六年制）に加えて、一九九一年に「初中」（日本の中学校にあたる）、一九九三年に「高中」（日本の高校にあたる）が開設され、最近になって高中の第三学年の学費も無料になり、十五年間完全無料教育が実現されることになった。また現在は、コンピューターや会計を教える夜間学校や託児所も持っており、いずれも無料でサービスを提供している。このように、ここ五年間の同善堂の発展はめざましい。

この他、毎月十五日から十七日の三日間、マカオの貧しい人々に無料で白米を配っている。この「派米」は、一九六八年以来、かつての「派粥」に替えて行っているもので、一人一袋十斤（年末は十五斤）の割り当てで、毎年十萬斤以上を配っている。また、不定期のサービスとして、交通事故や自然災害に遭った人を金銭的に援助することも行っている。

これらのサービスの運営経費については、不動産や政府の財政的援助を除く大部分が、個人や社団の寄付に由来する。毎年旧暦の十

月一日から、マカオ中の商店に手紙を出して寄付を募る「沿門勸捐」は、同善堂の主要な募金活動である。同善堂の職員の説明によれば、マカオの一般の人々は同善堂の慈善活動について実際に目で見知っているため自発的に協力し、いっぽう富裕な人々は「善心」があって気前がよい。また百周年の式典など、行事のための宴会の費用は、理事たちが分担する。一九九五年現在、毎年改選する理事会「値理会」の主席は、建築業を営む崔德祺で、一九五三年に主席になって以来、実に四十年以上も主席をつとめている。また、副主席は、崔榮其、許世元、何厚鏘、何婉琪（何鴻燊の妹）の四人で、彼らも一九九〇年以来、続けてその任にあたっている。同善堂の方から就任を依頼する理事の数は、最近になって増加の傾向があり、年によっては理事会のメンバーは五十人近い。崔德祺の息子の崔世安、甥の崔世昌・崔世平兄弟も理事になっている。理事には、エンジニアや医師など専門職の人々が含まれており、彼らの存在は、理事会の仕事を目滑りに進める上で大きな助けとなっている。

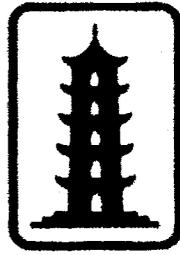
なお、同善堂と関わりの深いマカオの社団には、鏡湖医院の他に、「澳門紅十字会」（赤十字）や「潮州同郷会」などがある。

### （三）澳門日報読者公益基金会

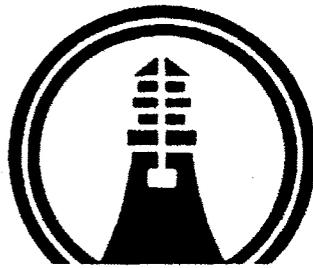
この慈善団体は、一九八四年に若手の華人商業エリートが中心になって基金をつくったことから始まった。「澳門日報」は、マカオで最大発行部数を誇る中国語新聞であるが、特にこの新聞社に強く結びついてきたものではない。第一屆の理事会（会董）からそ

の任に就いている劉衍泉会長は建築業であり、馮志強副会長も建築業、そして、もう一人の李鵬翥副会長は澳門日報の編集長である。

「香港公益金」(一九六八年設立)と同様、「百万行」を主要な募金活動としており、その名称やマーク(図を参照)からも、影響関係は明らかであるが、香港公益金とは連絡を取っていない。募金の分配の点から言えば、香港公益金は分配する団体が予め決まっているのに対し、澳門日報読者公益基金会は、そうした会員団体を持たず、その都度募金の用途を決めていかなくはならないという点が異なる。



香港公益金



澳門日報読者公益基金会

図 「香港とマカオの公益金のマーク」

現在、澳門日報の建物内で二人の職員が事務の作業にあたっているが、彼らの給料や百万行の準備費用、香港の慈善団体との交流費用などは、すべて会董の寄付で賄っている。百万行で集めた募金、

金額と名前が澳門日報に掲載される一般の寄付、それに政府の援助金は、原則としてマカオの社会福祉事業のためだけに使う。会董には、紹介を通じてなることができるが、その場合、年間会費千バタカの納付と寄付をしなければならぬ。寄付の額は任意で、数千バタカから数万バタカまで様々である。会董の仕事は、主に全体の会議(月一回)と各部門の会議に出ることである。

会董が所属する部門は、「緊急救援及策画部」、「公益援助部」、「教育助学部」、「団体關注部」の四つに分かれている。緊急救援及策画部は、マカオで起こった災害の被害者に金銭的な緊急援助をする部門で、一回(一人)あたりの援助額は、千バタカ前後である。公益援助部も金銭的な援助をするが、これは希望者が申請書を提出した後、調査してから援助の決定をする。夫が急死した未亡人や交通事故の犠牲者などのケースがあるが、最も多いのは病人の申請である。毎月、三十件から四十件の申請があり、援助の決定を受けた者は、事務所の小切手を取りにくる。一九九四年六月までの十年間に、一、一六九件に対して、八、四二九、五二〇バタカの援助を行った。教育助学部では、政府に登録している学校の生徒からの申請を毎年秋に審査して奨学金を出している。申請者は、千数百人いる。十年間で、延べ一三、九五三人に対して、六、四〇二、三一〇バタカを出した。団体關注部は、個人ではなく社団や学校に物質的・金銭的援助をする。例えば、社団にコピー機を贈呈したり、身寄りのない生徒が寄宿する費用を学校に贈ったりすることである。その他、毎年旧暦の正月に、老人ホームの老人や身体障害者、貧困家庭や孤児

院の孤児に対して、お年玉（「利是」）を配っている。個人には、一六〇パタカ、家庭には、六〇〇パタカが配られる。一九九六年は、一、三二五人と一、四五二戸が対象となり、一、〇八三、二〇〇パタカが使われた。また一九九五年から九六年にかけて、この四部門に加えて、新たに鏡湖医院と合同で「重見光明計画」が始まった。これは、白内障の患者が無料で眼科手術を受けるもので、澳門日報読者公益基金会は百万パタカを供出し、鏡湖医院からは医師が派遣される。現在のところ、この計画によって七十数名の患者の手術が予定されている。

年間行事のうち最も重要である百万行は、今日のマカオ市民にとっても、大きな行事である。この募金活動は、香港で行われているものと同じく、各会社、学校、社団ごとに隊をつくり、揃いの運動服を着用して、隊の横断幕を掲げながら行進するものである。マカオでは、毎年十二月の第二日曜日に行われ、三キロ・メートルを歩く。一九九五年は、元マカオ総督や当日飛行機で到着したポルトガルの大統領も含め三万人の参加者があり、六百万パタカの寄付金が集まった。参加のための寄付の最低額は、学生が十パタカ、個人が五十パタカ、団体が二千パタカ、スポンサーが三千パタカである。

マカオの百万行は、香港のものとは異なり、集めた募金全てを慈善活動の資金に回している。この点で、近年になって民間慈善団体の活用を図っている中国政府の関心を引いている。例えば、民政部は、その経験を広く中国国内で生かすことを目的として、一九九四年に代表を送って百万行に参加した。また、広州の「広州市教育基

金会」は、一九九二年に第一回の百万行を広州で実施して以来、澳門日報読者公益基金会社と交流しながら毎年百万行を行っている。この広州の百万行は、一九九三年の第二回では、第一回を上回る一億人民元以上の寄付金が集まり、五年で一億人民元のエデュケーション基金を集めるという当初の目標を越えて発展を続けている。

その他、澳門日報読者公益基金会は、百万行を行っている中山市とも交流を行っており、香港では、東華三院と連絡して、一九九四年六月に「広華医院」を訪問している。マカオでは、工会などの社団や政府の「社会福利司」と関わりがあるが、中でも街坊会との結びつきが深く、特に緊急援助に関しては、各家庭の事情に詳しい街坊会が必要家庭のリストを提出することになっている。

#### (四) 仁慈堂

ここまでに紹介したのは、今日のマカオを代表する華人慈善団体である。そのうち、鏡湖医院と同善堂は長い歴史を持っていた。しかし、マカオの慈善団体のなかで、紹介すべき「土生葡人」(Macaneseと言われる、マカオに根づいたポルトガル系の人々で、華人と混血している人々も含んでいる)の慈善団体がひとつある。そして、その歴史は、華人のものに比べてはるかに長い。

「仁慈堂」(Santa Casa da Misericordia)の建物は、「議事亭前地」というマカオの中心地にある。今世紀の初めには、同善堂もこの場所であり、前世紀末に孫文がマカオで開業した折りにも、仁慈堂が、この場所の建物を賃貸している。その後一九二〇年になって、

政府が郵便局を建てるために周辺の建物を取り壊したが、仁慈堂の白い二階建の建物は歴史遺跡として残され、今日も百数十年変わらぬ姿を見せている。

その建物の二階に「聖物」として安置されている頭蓋骨は、一五六九年に仁慈堂を創設した「賈尼努主教」(D. Belchior Carneiro)のものである。仁慈堂は、当時、ポルトガル人とともに世界中へと広がったポルトガルの民間慈善団体の一支部であった。その後、中国最初の西洋医学の病院である「聖辣非医院」(Hospital de S. Rafael: 当時の華人は「医人廟」と呼び、後に「白馬行医院」と改称した)をはじめとして多くの社会福祉施設がマカオに建設され、その運営費用は仁慈堂から支給されたため、当時のマカオの華人は仁慈堂のことを「支糧廟」と呼んでいた。

現在、仁慈堂の施設は、託児所二つと老人ホーム一つしかない。運営費は、政府からの財政的援助が三分の一を占める。残りは、不動産の賃貸料の銀行利息で、寄付は少ない。以前には多くの寄付が寄せられたが、それは、建物の中の壁に飾られた、寄付をした商人たち(華人も多い)の大きな肖像画からも窺うことができる。

## 五、華南地域における市民社会の歩み

前節では、マカオを代表する慈善団体を四つ選んで紹介した。そこから明らかになったことは、ポルトガル勢力の衰退と、それに併行した中国・香港を含めた華人社会の結びつきの強化という近年の

動きである。広州にも民間慈善団体ができた今日、香港・マカオ・広州のつながりは、解放前の姿に近づきつつあると言える。しかしながら、中国から見た場合、香港の慈善団体とマカオの慈善団体は性格が異なる。香港の慈善団体は、その経費の多くを政府の財政的援助に頼っているのに対し、マカオの慈善団体は、政府の援助が少なく、民間の寄付に頼って運営されている。鏡湖医院や澳門日報読者公益基金会の職員が指摘していたことであるが、このことを理由に、中国政府は、香港ではなく、マカオの慈善団体こそ参考に値すると見なしている。

このマカオのノウ・ハウの中国大陸への伝播の例として興味深いものが、百万行である。百万行は、一九七一年に香港公益金が初めて採用した募金活動である。香港公益金自体は、募金活動を統一して資金を各団体に分配するというアメリカ合衆国の慈善団体(The United Way)の方法をモデルにしてつくられたものであるが、百万行という募金活動は香港でつくられ、今日では市民の誰もが知る香港公益金を象徴する行事となっている。しかし澳門日報読者公益基金회가設立された一九八四年には、香港市民と違って、マカオの市民には馴染みがなく、その移植には苦勞が伴った。

このマカオの百万行の初期の時代に尽力したのが、会董の冼志耀である。彼は、一九四一年生まれで、祖父が鏡湖医院と同善堂の理事、伯父が同善堂の理事をそれぞれ長くつとめた名門の出である。一九八〇年代から、彼は同善堂の理事として慈善団体の活動に加わることになるが、それ以前からサッカーを中心に積極的に参加して

いたマカオの体育活動における運営経験が、会場設定などの百万行の準備に生かされた。彼の総指揮の下、六か月の準備期間を経て一九八四年十二月二日、第一回目の百万行が行われた。<sup>③④</sup>

その後、改革・開放政策の恩恵を受けて経済成長を遂げた広東省の都市部に百万行は伝わっていった。最初のもものは、一九八八年の中山市の「万人行」である。これは、一九八七年の年末に、若き湯炳権市長が程錫銘文化局副局长に向かって、一般の人々の文化生活にふさわしい賑やかな新しい正月行事を提案したことに起源をもつ。そして今日では、「中山人」となって万人行が行われる旧暦の正月七日は、一年中で一番賑やかな日であり、中山市が裕福なために万人行の実施が可能であるという連想から、誇らしげな行事ともなっている。音楽や芸能などの市民の技能・芸術も行進の中に生かされるこの行事は、程副局长の言葉を借りると「新民俗文化活動」であり、中山市民の他にも、商用で訪れた香港人や日本人も行進に参加する。また第六回（一九九三年）を例に出すと、集められた九五〇万人民元の募金が、養護学校の設立や赤十字病院における貧者の無料診察などに使われており、社会福祉の向上や富の再分配を促す市民の社会活動として実地上の機能を持っている。さらに一九九二年、前述の広州市の他、中山市近郊の港口鎮においても教育基金百万行が行われるようになった。<sup>⑤</sup>

この百万行は、香港が生んだ市民社会の文化と言ってよいであろう。香港からの近年の移民は、かつてのチャイナタウンに代表される中国文化とは異なる、独自の生活文化を新世界の諸都市にもたら

しているが、その事例のひとつと指摘できる。例えば、カナダのバンクーバーにおいては、「中僑互助会」が、マカオに遅れること一年あまりの一九八六年から毎年百万行を盛大に行っている。<sup>⑥</sup>この香港文化の輸出に関係して、中国への返還を控えたこの十年の間、香港からの移民、特に専門職を持った中産階級の移民による「頭脳流出」とそれに伴って生じる香港の社会的危機が、各種の報道や人々の日常会話において繰り返し取り上げられてきた。またいっぽう、七十年代以降に独自の香港文化を形づくってきた香港生まれの中年世代のエリートたちが移民していくのに入れ替わりに、商業を目的として中国から多くの共産党幹部が香港へ入ってくるという動きがあり、香港出身で世界的に活躍する人類学者は、コスモポリタンの文化と専門主義を洗練させてきた香港文化に対する新来者の認識不足を指摘している。<sup>⑦</sup>しかしながら、百万行の事例にもとづくならば、香港から新世界へと人材が流出していくいっぽうで、香港の良質な文化が内地へと伝わる可能性もあることを私たちは想像できる。そして、その場合にマカオが果たす媒体としての役割も軽視できないであろう。広州・中山の百万行は、澳門日報読者公益基金会の職員

の説明によれば、全てをマカオから学んでいる。

中国をめぐる国際情勢の変化に伴い、世界各地の華人社会は、今日活気を見せている。その動きに対して、私たちは、歴史を踏まえながらも、新たな視点を持って問題化する必要がある。その点で、「香港文化」や「香港人」に目を向けることは重要な手掛かりとなるであろう。しかし、アメリカ合衆国の募金の文化が与えた影響が、

戦後の日本と香港において異なる募金の文化を生み出したことから窺えるとおり、世界規模の、あるいは地域・民族ごとの、画一的な文化の広がりに対して、個々の社会は、それぞれ異なった対応を準備する。本稿において、近年のマカオの動きを香港・広州と歴史的に関係づけながら紹介したのは、華南地域の統合にまつわる近年の社会的・文化的現象が、単なる一時期の政治的・経済的な事件の表れであるに止まらず、世界的な人々の移動とそれに伴う文化の動態を複雑に反映したものであつたからである。その点を最後に改めて強調し、この問題提起を結ぶことにする。

#### 注

- (1) 特に文化人類学、及びその隣接分野における香港研究の発展については、次の論文集を参照されたい。瀬川昌久編『香港—文化人類学からのアプローチ』東京、風響社、一九九七年刊行予定。
- (2) 可児弘明編『もっと知りたい香港』東京、弘文堂、一九八四年、中嶋嶺雄『香港—移りゆく都市国家—』東京、時事通信社、一九八五年。なお、現代の香港人の一般的な生活において、マカオは、香港では禁止されている賭博を週末の一泊旅行を通じて楽しむ場所としての付属的な位置を占めているに過ぎないとも言えるので、これらの香港についての概説書がマカオに対して付属的な扱いをしていることを根拠に、その価値を貶めることは不当である。
- (3) 資料は、一九九三年九月から一九九五年八月、及び一九九六年一月から三月にかけての、筆者の香港での実地調査期間中に集められたものである。

- (4) 夫馬進「清代沿岸六省における善堂の普及情況」『富山大学人文学部紀要』第七号、一九八三年、一五一—四五頁。
- (5) 山本進「清代後期江浙の財政改革と善堂」『史学雑誌』第一〇四編、第二二号、一九九五年、三八一—六〇頁。
- (6) 可児弘明『近代中国の苦力と「猪花」』東京、岩波書店、一九七九年。
- (7) 帆刈浩之「清末上海四明公所の『運棺ネットワーク』の形成—近代中国社会における同郷結合について—」『社会経済史学』第五九卷、第六号、一九九四年、一一三—二頁。
- (8) J・C・ミッチェル編（三雲正博・福島清紀・進本真文訳）『社会的ネットワーク—アフリカにおける都市の人類学—』東京、国文社、一九八三年。
- (9) 当然のことながら、この個人間のネットワークと団体間のネットワークのあいだの関係を調べることは、また別の問題となる。しかし、この二つのネットワークを分けることによって、その個人自身か、それとも、その個人が属する集団か、そのどちらが問題になっているかが明瞭になるという利点はあろう。
- (10) 帆刈浩之「香港東華医院と広東人ネットワーク—二十世紀初頭における救済活動を中心に—」『東洋史研究』第五五巻、第一号、一九九六年、七五—一〇頁、九一頁。
- (11) Elizabeth Sinn, *Power and Charity: The Early History of the Tung Wah Hospital, Hong Kong, Hong Kong: Oxford University Press, 1989*, p.80.
- (12) Huguette Ly-Tio-Fane Pinoc, *Chinese Diaspora in Western Indian Ocean*, Port Luis: Chinese Catholic Mission, 1985, pp.87-88.
- (13) 香港の代表的な慈善団体の概略については、次の拙稿を参照されたい。芹澤知広「香港における華人慈善団体の現在—人類学と歴史—」

史学の協同へ向けて―』『年報人間科学』第一七号、一九九六年、一四一―一五六頁。

- (14) 《仁濟醫院第廿六屆董事局北京訪問團特刊》、一九九三年。
- (15) 《東華通訊》(東華三院) 第二卷、第二期、一九九四年。
- (16) 《澳門日報》一九九五年三月五日。
- (17) Anthony R. Dicks, "Macao: Legal Fiction and Gunboat Diplomacy", In *Leadership on the China Coast*, ed. by Goran Aijmer, London: Curzon Press, 1984, pp.90-128.
- (18) 冷夏《何鴻燊傳》香港、明報出版社、一九九四年、三八四―三八五頁。
- (19) 鏡湖醫院慈善會《鏡湖醫院一一五周年紀念特刊》、一九八六年、四七頁。
- (20) 同書、八九―九〇頁。
- (21) 李德超〈澳門之中文碑刻與澳門史研究〉林天蔚(主編)《亞太地方文獻研究論文集》、香港、亞洲研究中心、一九九二年、一七〇―一八九頁、一七五頁。
- (22) 鏡湖醫院慈善會、前掲書、五一頁。
- (23) 同善堂值理會《同善堂一百周年紀念特刊》、一九九二年、八六一―八七頁。
- (24) 同書、八八―八九頁。
- (25) 《澳門日報讀者基金會成立十周年紀念特刊》、一九九四年、一五頁。
- (26) 同書、一五頁。
- (27) 同書、四七頁。
- (28) 梅士敏〈仁慈堂四百二十五年〉《澳門日報》一九九四年四月一六日。
- (29) 日本においては、このアメリカ合衆国の方法が一九四七年に伝わって、今日まで続く「赤い羽根」の共同募金が始まった。
- (30) 林昶《濠江青英錄》澳門、澳門出版社、一九九一年、五四―五八頁。
- (31) 孫玉紅〈中山慈善万人行〉《广东民政》第三〇期、一九九三年、二一―二五頁、一三頁。
- (32) 鄭昇輝〈溫哥華中僑百萬行籌款〉《澳門日報》一九九五年七月一日。
- (33) Helen F. Siu, "Remade in Hong Kong: Weaving Into the Chinese Cultural Tapestry", In *Unity and Diversity: Local Cultures and Identities in China*, ed. by Tao Tao Liu and David Faure, Hong Kong: Hong Kong University Press, 1996, pp.177-196. なお、ヘレン・シウ教授は、一九九六年七月一日に大阪で行われた「人類学コロキウム」(大阪大学人類学研究室主催)においても、同タイトルの講演を行っている。

## **Unification of South China Region Viewed from the Charitable Organization: Specially focused on Recent Examples of Macau**

Satohiro SERIZAWA

Compared with the case of Hong Kong, there are few Japanese people argue the problems of Macau before and after its reintegration to China. The recent development of Chinese society in Macau, however, is strongly related to other cities in South China region: especially Canton and Hong Kong. Therefore it is needed to treat the Macau case for analyzing the future of the unification of this region.

There has been many networks between charitable organizations in this region through modern Chinese history. Now the new establishment of non-governmental organizations in China brings the revival of these networks and the new culture of civil society. For the government of People's Republic of China, the management of the charitable organization in Macau is more suitable for importing into the Mainland China than that in Hong Kong, because the government does not provide charitable organizations with much fund in Macau. For example, one event of fundraising for charity started in Zhong Shan City in 1988 by following the way of a charitable organization in Macau. But the organization also learned a famous fundraising campaign in Hong Kong and started the event in 1984. Thus we can conceive that Macau is a key mediator for importing the culture of civil society in Hong Kong into the cities of Guangdong province.

### **Keywords**

South China region, charitable organization, Macau, culture of Hong Kong, civil society